nanako-fifteen

II

第五章

さようなら

a.minemura

nanako-fifteen　Ⅱ

登場人物
5・さようなら
060.
061.
062.
063.
064.
065.
066.
067.
068.
069.
epilogue
あとがき
奥付

登場人物

間宮 ひろ	高校二年生　陸上部で活動中のスポーツ少女
桧山 健	大学生　ひろと同じマンションの住人
新城 富夢（とむ）	(株)新城不動産の社長でマンションのオーナー
新城 なおみ	新城不動産の専務　社長夫人
権田 トオル	高校生　柔道部と華道部の両方に籍を置いている
河合 ヤスオ	高校生　陸上部のマネージャー
河合マスター	ヤスオの父　お好み焼屋のマスター
間宮宮司	ひろの父　神社の宮司
ななこ	記憶喪失の幽霊

５・さようなら

060.

　合宿の中止で体力はあり余っていたし、とにかく気持ちが急いてエレベーターを待っていられない。階段を二段ずつとばして駆け下りた。
　一階の管理人事務所のドアをこれまた力任せに引っ張って開けると、社長と桧山がクーラーの下で談笑していた。

「おお、ひろちゃん、いいとこに来た――」と言いかける社長を無視して、ひろは桧山のブルーグリーン地に水玉のタイを両手でつかんで締め上げた。
「な、なにするんだ！！」
「桧山さん！　わたしといっしょに来て！」

　桧山は困惑しながらさすがに腹が立ってきた。今日のひろはおかしなことばかり言ってわけがわからない。つきあいきれないと思い、体を引いたが自分の首がしまっただけだった。

「いっしょにわたしのお父さんのとこへ行って！」
「お取り込み中のとこなんだが、ひろちゃんや。昼過ぎに間宮のおじさん、キミのパパから何度か電話がかかってきてさ、キミんとこにもかけたんだがつながらないとかいってたよ」

　ひろは地団太踏んだ。携帯電話のバッテリー切れという大バカをやってしまったのは自分だった！

「う～む。そうか～」社長は腕組みして真剣な顔だった。「ふたりはすでに……間宮のおじさんは祝詞をあげたくてうずうず……おじさんとこはウチとちがって不景気……だから……婿どのをつかまえとこうと……なるほど。よし」

　社長は脳内ですばやく物語を展開させ、たちどころに己の立場を理解した。「はい。車のキー」

　ふたりはベンツのキーを託され、事務所を追い出され、ひろは桧山のタイをつかんだまましばし呆然としていた。絶対放すまいとしっかりつかんでいたのだ。赤くなりながらあわててタイを放り出し、

「あ、あああああああの、わ、わけはあとで説明するわ！　だから、とにかく、うちのお父さんのとこへ！」

　ひろにあわただしく急かされて、桧山はとにかく車に乗った。社長のベンツは最新のカーナビをとりつけたばかりで、設定を桧山がいじったので扱いかたはよく知っていた。ひろの言うままに彼女の実家のあるあたりを目的地に定める。
（鳥居のマーク……神社？）
　直近のインターチェンジから高速に乗ってすぐ、ひろは口を開いた。
「わたしのお父さんのとこに、ななこさんがいるわ」
「――だれ？」

　ひろの口は、からからに渇いていた。

「ななこさん、ななこさんよ。わたしは姓を知らないわ。でも桧山さんの知ってるひとでしょう？」
「西ノ宮……？　まさか……」
「にしのみや　ななこという名だったのね」

　ああ……と、ひろは胸落ちする思いだった。彼女は西からの光の中で生き生きと輝いていた。そこは彼女の故郷だったのだ。

061.

　その名前に桧山が顔色を変えるのがわかった。彼にとってこの上もなく大事なものなのだ。彼の反応を見るのがこわい、見たくない、とひろは冷感を覚えながら考えた。

　だがもう話すと決めた。彼はひろの私生活の中にだれかが深く入り込んでいることを疑っていたが、それが彼自身の過去に由来する者ならば、彼に知らせずにすますわけにはいかなかった。

いつのまにか彼、桧山　健に特別な想いを抱いているひろがそこにいた。ななこの話を聞くうちに『ななこ』を追体験することで伝染した想いなのかもしれない、とひろは思う。たしかに友人の相談ごとや体験談をきいているうちに、友人とその恋の相手に共感なり反発なりおぼえることはあったが、そういうのとはなんか違うよ、という自覚があった。

ひろの想いは現実の桧山　健に触れたことで生まれたものだ。誰のものでもない。

これまでななこに対してなんとなく後ろめたいきもちもあったが、今となっては堂々と言える、と思う。「わたしは桧山さんが好きなんです」と。ななこに、桧山に、自分自身に。

だが桧山の中には神聖な死者、西ノ宮奈々子がいた。

あの梅雨いりしたばかりの蒸し暑い夜、彼女はあらわれた。

それは桧山の強い召喚によるものだったのだ。

桧山には呼んだ覚えがあった。たしかにあった。奈々子の思い出に動揺して人目もはばからず涙した、苦い思い出と共に。それが彼が感じることすらできない次元でじっさいにかたちを成していた。奈々子は彼の呼びかけにすぐさま応じ、彼のそば近くに存在したのだ。つい、何時間か前までは。

彼女はあらわれた当初、記憶を喪失した状態だった、とひろは語る。

桧山に呼ばれてやってきたのは間違いないが、なぜそんなことになったのか、ななこ本人にもわからなかった。失くした記憶を取り戻すうちにあるいはその理由が明らかになるかもしれない、とななこはひろに訴えた。記憶を取り戻す経過の中、ななこはひとつ部屋でひろとともにすごしたのだ。

「奈々子がおまえといっしょに……？　おまえの部屋にいたのは奈々子だったのか……？」

　桧山は低くしわがれた声でたずねた。

　三年前に死んだ西ノ宮奈々子の近況を聞くという異常さに、衝撃を受け、激しく動揺していた。

　ひろはたずねられたことに、ええ、とうなずき、「彼女は、記憶を取り戻して、自分と桧山さんが、その、どういう結びつきがあったのかわかるまで、って言い方をしたの。それがわかったら……」

「……」

「その時は、行くつもりだったんだと思う」

「行く？」

「……それでお父さんのとこへ……」

「……夕べ、奈々子に逢った」

「え」

「白い夏服姿で……水辺に立っていた。凄いような夕陽だった」

「……」

「風にふかれて気持ちよさそうにしていた。とても……いい表情だった」

「……」

「なにも話せなかった。が……なぜか、別れを言いにきたんだと思った」

　長い沈黙のあと、ひろはつぶやくように言った。

「……わたし、前にお父さんに聞いたことがあるの。死んだ人を忘れてはいけないよ、って。同じ世界にいないというだけで忘れられた方は、とても悲しいって。呼びかければ、必ず……」

ひろは絶句し、顔を両手で覆った。桧山があの妖精のようにたおやかな美少女を忘れることはないと、わかってしまったのだ。

062.

ひろは声を押し殺して泣いた。
どんな理由にせよ、この人の前で、ななこのことで泣くことはできないと思った。
だが涙は押しとどめようがなく、ひろは声を押し殺して泣き続けた。
慰めも救いもありえない涙をひろは生まれて初めて味わった。おそろしく苦く、長く、絶望的な嗚咽だった。
慰めも救いもあってはならなかった。
桧山さんが三年間押し殺し続けた悲哀とは比較にならないじゃない、ひろはそう思った。

唯一やってきた救いは、カーナビが告げる、短い旅の終わりだった。
高速道路を降り、一般路を経由して山道にはいる。ひろの実家はインターチェンジからかなり離れていた。

「ひろ」
泣き崩れるのを必死でこらえている相手にかけられる言葉などない、と桧山は思った。
「窓を開けよう」
サイドウィンドゥがわずかに開き、外気といっしょに芳香が流れこんで来た。
ひろは思わず、目を開き、うめきながらヘッドレストに頭を押し付けて窓の外をみた。そして自分で脇のコンソールをさぐり窓を全開にした。
風が前髪をなぶり、さわやかな香りが車内に満ちた。
周囲には桧の杜が黒々と広がっていた。

*

「桧山君がここへ来るよ」
「……ひやまさんが……」
「ひろが連れて来る」
「いっしょ、なのね」

「待っていよう」
「……いいえ」
「会わなくていいのかね？」
「ええ。あのふたりがいっしょなら。――私のするべきことはおわりました」

*

ひろは母屋の玄関を通らず、車を回した裏庭から斎場への暗い通用口を入っていった。
桧山は鼻先でおどるひろのポニーテールを夢見心地で追った。
ここへ来るときに大きな鳥居をくぐった。参拝人用の駐車場がその奥にあるので車で通れるのだが、ひどく罰当たりな気がした。
聖域に土足で踏み込んでしまった実感があった。
この先に死んだ奈々子がいるのならそこはまさに聖域にちがいなく、日常世界とは異なる場所だった。空気というか雰囲気が外と違う。自分は本当は自分ではないのではないかという妙な感覚が襲ってきた。
神妙な気分は神社という特殊な場所のせいだと自分を納得させ、行く先に灯明がともされた広い斎場を見た。
間宮宮司は神官の装束を身につけ、そこで礼拝していた。

息せききってやってきたふたりをみて、宮司はそっとうなずきかけた。
父の着けている装束とその場の雰囲気からひろは察した。
ななこは行ってしまった。
泣いてはいけないと思った。振り向いて桧山をみる勇気がなかった。父はつと立ち上がり、足音もなく床を歩いてきて「おまえはちょっと奥へ行っていなさい」と言った。「彼と話したい」
ひろは言われるままに、うなずき、立ち上がった。彼の前では泣けないがひとりになれば、かまわないだろう……

063.

「間宮さん、奈々子は……」
「……ななこ？」

「？　話というのは奈々子のことではないんですか？　ひろの、いや、ひろさんの部屋に住み着いていた少女の幽霊のことでは？」
「ああ、うん、ひろの部屋にいた女の子のことだ。彼女、ななこさんというのかね？」

　間宮宮司は奈々子の名を確かめなかったのか、と桧山は疑った。

「西ノ宮 奈々子という名前でした」
「おお……」と宮司はおどろいた。「西ノ宮……」
「間宮さ……宮司は西ノ宮をいう名をご存知なのですか？」桧山は勢い込んで尋ねた。
「いや」と拍子抜けする素っ気なさで答えが返ってきた。
「そういう名の知り合いはいない。だが、そうか、西ノ宮、ね……ああいや、すまない、彼女は別の名を名乗ったのでね」
「別の名前とは……なんのことですか？」
「きみはもしかしたら私のような職にある者を胡散臭く思うかもしれんが」
「……」
「彼女が自分で名乗った名は、ここでは口にできん。非常に、強い力を持った名だからだ」
「……」
「きみが住んでる町に竜神湖という湖がある。それは観光用の通称で、ほんとは違う名前だ。そして彼女はあの湖の主（ぬし）だ。どうだね、胡散臭い話だろう？」
「はあ……」
　宮司はふっと笑った。「立ちなさい。桧山くん。夜は長い。中に入りなさい」

064.

　杉材を使った板の間はひんやりと心地よかった。宮司自ら麻の座布団を持ってきて桧山に勧めた。

「——宮司、それで」
「まあ、待ちたまえ、私にも質問させて欲しい。聞かせてくれないかね、その西ノ宮くんの死因、彼女がなぜ亡くなったのかを」
「——西ノ宮は、交通事故で……直接の死因は全身を強く打ったことです……それがなにか……？」
「そうか、交通事故で。ほら、亡くなった本人は自分がなぜ死んだのか、知らないものなのだよ」
「……」

「人は、自分がどのくらい生きるのか、寿命がいつ果てるのか知らない。だが、この世に生まれる前は承知している。自分の寿命を承知して生まれてくる。西ノ宮くんも、知っていた、と言っていたよ」
「——交通事故で死ぬことをですか！？」
「いや、病気、怪我、事故、事件、理由の如何に拘わらず、その時が来ればそうなるのだ。彼女はこの世を去るべくして事故に遭った。ただ、肉体に経験したことのない強烈な刺激を受けたがために、すんなりあの世に行けず……ほら、コンピューターゲームで、バグというのがあるだろ、あんな感じで、この世に引っかかってしまったらしいんだな。記憶喪失もそのためだ。不測の事態で、あの世に移行できずにいるところを、きみに呼ばれたのだ」
「はあ」
「うむ。かんたんに納得できる話じゃないだろうね」宮司はよくある話のように、あっさり言った。
「しかしこの世からあの世へ移行する魂は、時間というものに縛られない。きみには三年も経っていても、だ。きみは時空を超えて彼女を呼んでしまった、というわけなのだよ」

　そうなのだろうか、と桧山は頭のどこかで考えている。なにか釈然としない。
　奈々子の死を悼む。彼女に近しい人々には当然そういう場面があったはずではないか。とくに、奈々子の母親などは。通夜では毅然としていたが、人目のないところで涙にくれ、名を呼んだはずではないか。弟の正弘だって。それを——
　ほんのひとつきかふたつきの付き合いしかなかったオレのところにくるなんて。

065.

「西ノ宮が、竜神湖の主（ぬし）だというのは本当なんですか？」

「きみは信じるかね？」

「いや……ちょっと信じられない」

「うん、そうだろうとも」

「本人がそう言ったんですか？　しかし……宮司がそうおっしゃるからには……」

「桧山くん、私がそう言ったからと言って、あるいは西ノ宮くん本人がそう言ったからと言って、信じなければならない謂れはないのだよ。私が戯言を言っているだけかもしれない。西ノ宮くんがウソをついてる可能性だってある。大事なのはさまざまな事象を、自分の目でよぉく観察することだ。それから考えることだ」

＊

「彼女は、自分が十代半ばまでの寿命だということを生まれる前から知っていた。その十数年の人生の中で、果たすべき目的、というものがあって、それが完了したからこの世を去ろうとした」

　宮司の言葉を聞きながら桧山は考えていた。それはどんな目的だったのだろう。読書感想文コンクールに優勝することだったのだろうか。だって、事故はまさに、そのタイミングだったではないか。けれど――そのために十五年の人生を賭けた、なんて、奈々子らしくないという気がした。

　そんな桧山の心の声が聞こえでもしたかのように、宮司は言う。

「彼女の人生の目的は、ある人に逢うことだった。逢うこと、それがすべてだった」

「逢うことが？　すべて？」

「人生にどんな目的を定めているか、それは人によってさまざまだ。他人の目に、なぜそんなことのために、と見えようと、本人にとってはひじょうに重要なことなのだ。クリアすることが必要だと魂が定めた目的なのだからね」

＊

　じっさい――

　間宮宮司は少女から多くのことを聞きだしていた。

「湖の主（ぬし）ともいうべき貴女がなぜ――」

　少女はふつうの人間ではなかったのだ。そのような存在が、なぜ、この世界にやってきたのかと、宮司は問うた。

　ある人に逢いにきたのです、と少女は言った。そして、黒々とした瞳で、まっすぐに宮司を見た。

「私には息子がいます。桧山 健さんは息子の名付け親なのです」

　宮司はびびった。桧山 健。新城不動産のオフィスでアルバイトしてた大学生。彼が！？　この少女の息子の、名付け親！？

　少女は目を伏せる。長いまつ毛が十五歳の初々しい面に影を落とす。

「遠い遠い昔のこと。まだ若かった私は、過ちを犯しました。神々から禁じられた相手と恋に落ち、息子が生まれたのです。ある理由から、神々はたいへん怒り、息子は取り上げられてしまった。息子は破邪の水のなかで育ち、名もなく、親も知らず、成長しました。そして、かつての桧山 健さんに出会ったのです。息子は彼にとても惹かれ、彼がつけた名前を受け取りました――」

「けれども――その世界は滅びました。息子は、桧山さんを不条理に失い、その衝撃にたえきれず、ついに潜在する力を開放してしまったのです。それこそが、神々が恐れ、私から取り上げた理由だったのです」

「かつての桧山さんと息子がそのような関係だったことを、私は、第三者から、人づてに、聞くことになりました。私たちは、まったくお互いのことを知らなかったのです。名を持たなかった息子に名前をくださったひとに、私はいつか逢わなければならないと思いました。この世界の時間にして、およそ二万年ほど前のことです。そしてようやく、この時空で桧山さんに会うことができました。彼の人となりを見ること、それが私の目的だった。ほかに何もなかった。私は十分、満足し、帰ろうとしました。
ところが、思いがけないことが起こりました。帰る途中で、ひろさんに出会ってしまった。ひろさんが、かつて破邪の水から息子を引き揚げ、最初に胸に抱いたひとだったとは……」

「う、うちのひろが！？」宮司は思わず話の腰を折ってしまうくらい。驚いた。
「私は、まだ帰ってはならなかったのです。息子の声が聞こえるようでした。『待って。紹介するよ。このひとがぼくのおかあさんなんだよ』」

　そう口にすることが、彼女の心中にどれほどの波をたてるものか。少女は苦笑いのような表情を浮かべた。
　それを見つめながら宮司は思った。この少女は自身のことを知らないのではなかろうかと。どんな表情を浮かべても目を吸いつけられる。心惹かれる。胸を締め付けられる心地がする。自分のような中年男だってそうなのだ、年若い者なら言わずもがなにちがいあるまい。同性のやっかみを買うかもしれないが、異性の心をとらえて離さないだろう。そういう、自身に具わっている魅力を、この少女は自覚していないのかもしれない。

その静かに落ち着いたまなざしも何層もの音が響き合うような声音も、十五歳の少女のものではなかった。まさに、人間離れしていた。それはたちどころに人を魅了してしまう。

　宮司の霊的な感覚には、少女はひじょうに繊細な霧が人の姿をとっているようにとらえられていた。それはあきらかに人ではなかった。

　ただ逢いにきたのだと少女はいう。しかし、三年前のまだ少年だった桧山健はしっかりと心をつかまれてしまったらしい。気の毒なことだとさえ、宮司は思った。彼らは永遠に交わることのない道を歩く者同士だというのに。

*

「桧山君がここへ来るよ」
「……ひやまさんが……」
「ひろが連れて来る」
「いっしょ、なのね」
「待っていよう」
「……いいえ」、
「会わなくていいのかね？」
「ええ。あのふたりがいっしょなら。――私のするべきことはおわりました」

066.

　ひろは自分の部屋で一晩泣き続け、明け方、人の声と車が出て行く音でまたひと泣きし、泣きつかれて眠ってしまった。
　昼近くになってようやくごそごそと起きだし、重い足をひきずって父のところへ行った。父はTVでスポーツ観戦中だったがひろを見て言った。

「若い娘がなんてかっこだね。風呂でも浴びてきたらどうだね」

　言われてみれば、昨日の昼に河合マネに呼び出されてあわてて出かけてそのままだった。こっくりとうなずきながら、畳に座る。

「お父さん」

「んー？」
「……あの、桧山さんは？」
「帰ったよ、明け方。おまえによろしく言っていた」
「夕べ泊まってったの？」

　父はTVをけしてちゃぶ台越しに娘に向き直った。

「ああ。夜道を帰らすのもなんだと思って引き止めた。と言っても、なんとなく明け方まで話し込んでしまったんだがね」
「なに話してたのよ」
「ほれ、おまえの友達のななこさんのことだ。まあ、弔いだね。彼……誰かとななこさんの思い出を語ろうにも語れなかったんだな。ずっと気持ちを押し殺してたんだろう、話が……尽きなかったよ」
「そう……」
「もう一日二日、ゆっくりしたらどうだと勧めたんだが、彼女のうちへ行っておきたいというんで」
「彼女のうちって、ななこの……？」

　父はそうだとうなずいた。
　桧山が離れていく、とひろは感じた。ななこも結局、だまって行ってしまった。
　桧山とななこの間にはなにかしら強い絆があって、いちどは切れたそれをひろが間に立って結び直してしまった、そんな気がした。
　なんだかな、とひろは思った。――わたしは蚊帳の外のひろちゃん、だったのか

　父はいくらか改まって言った。
「あれだ、ひろ、おまえにもなまじ力があるもんだから彼女みたいなのが見えてしまうんだが、今度はすぐに父さんに言うんだぞ。世の中には若い娘の手に負えんことが山ほど転がってるからな」

「ねえ、お父さん」
「ん？」
「おなかすいちゃったよ。昨日のお昼にお好み焼きをちょこっと食べたっきりなんだわ。お母さんは？」
「母さんは夕方まで帰ってこないぞ。そうか腹が減ったか、よしよし、なんか食いに行こう」
「わ、ほんと！？　やたっ！！」
「おまえはなんとかより食い気だなあ」

*

西ノ宮 奈々子から聞いた話を、宮司は自分一人の胸に納めた。

彼女の話を総合すれば——娘と桧山 健とは浅からぬ縁でつながっていることになる。
彼女は最後にこう言い残した。

「息子はこの世界で、彼自身が選んだ両親のもとに生まれることを望んでいます。それは神々が承認しています。つまり、神々の、祝福のもとに」

067.

西ノ宮家は住宅地の一画にこざっぱりした佇まいで収まっていた。以前に来たときとなにもかわっていない。
奈々子の母親もいくぶんやつれた印象はあるものの、娘の面影を感じさせて桧山は心ならずも胸苦しさを覚えた。三年間の無沙汰をたがいに詫び、桧山から近況の報告をひととおり受けた後、彼女は「じつは……」と切り出した。

「奈々子の三回忌も済ませましたし、この家、手放すことにしまして……わたくしの田舎の方へ引っ越すことにしたんです。それで……奈々子の遺品なんですけど」

母親が取り出したのは裏に止め紐のついたまち付き封筒だ。A4サイズが入る大きさので、中身がしっかりつまって、かなり分厚い。紐は締められていて上から透明なクラフトテープで封がされていた。桧山は、あ、と思った。「文芸部の部室にあったんだ」、弟の正弘が言ってなかったか。「ななこちゃんといっしょにお棺に入れて、送ってやろう」、と。

「——これを——？」

「ええ。私の祖母が……もういい年なんですが……お棺を閉めるときに、これは燃やしてはいけない、と言って、取り出したんです。『奈々子にいちばん縁のある人に渡しなさい』と、そう言うので、私が預かりました。

預かったものの、いったいどなたに渡せばいいものか見当もつかず、私自身、手放しがたくて……とうとう三年が経ってしまい……。よくよく思い出してみますと、娘は生前、ごくたまに、ひやまさん、と口にしたことがあったんです。そういう時の娘はいつもとは違う顔つきで、なにか思うところがあるのだろうと、傍目に。そういえば、秋の冷たい雨の日に家まで送ってくださったのが、ひやまさんだったと……」

「それで——僕に——？」

「……ええ。唐突にお思いでしょうけど、この原稿を書いていたのは、あの後のことですし。私、ほかに思い当たるふしがないんです」

西ノ宮家のリビングに飾られた読書感想文全国コンクール優秀賞の賞状。いっしゅん目を瞑り、桧山は首を横に振った。

弟の正弘は、奈々子の文芸的な才能をいち早く見抜き、惚れこみ、文芸部へ勧誘した。が、勧誘に直接動いたのは女子部員で、黒幕が桧山 正弘だったことを、奈々子は知らなかったはずだ。

そう思ったが、彼は口に出さなかった。

「僕の弟が……当時、一応文芸部に在籍していて、口の軽い、面白おかしい性格だったんで、印象に残ったんじゃないでしょうか。そうだ、へんに印象的なやつなんです。僕も時々彼のことを思い出してひとりで笑ってしまうことがありますよ」

できるかぎり軽い口調で、正弘のことをそう説明した。
奈々子をもっともよく理解していたのは、おそらく正弘なのだ。だが、そう明かされることを、正弘が望むとは、思えなかった。
この分厚い原稿を正弘は気にしていたけれども、奈々子の曾祖母にあたるという人の勧めで手にすることを、正弘が望むとは、やはり思えなかった。

奈々子の母親は三年思い悩んで桧山に連絡をとったのだという。大事な娘の遺品を手渡そうと。その思いに沿えなくて、申し訳ないとは思う。奈々子には確固とした縁のある人間がいるはずなのだ。

（それは、オレじゃないというだけのことだ）

しかし、これは本当のことだ。

「僕はただ、雨の日に奈々子さんをこちらまで送り届けただけです」

068.

「申し訳、ありません」
桧山はそう詫びずにいられなかった。奈々子の母親は気まずい思いをしていると思えたから。

「とんでもない、わたくしの方こそ。お呼びたてしてしまって。ごめんなさいね。あ、そうだわ、あなた、本に興味はおありかしら。あの子の本がねえ、こむずかしくてわたしにはとても読めないし、本人は大事にしてたみたいだから処分するのも忍びなくって……」

初めて足を踏み入れる奈々子の部屋は——驚くほど、ひろの部屋、模様替えしたあとのひろの部屋と、雰囲気が似ていた。

どれでもどうぞ、と勧められるまま、書棚からハードカバーの本を一冊抜き取った。赤い布張りの表紙、高校の二学期の始業式の日、本屋で奈々子にとってやった本だ。

「あら、『キリガミネ探訪』ですわね」
桧山はちらっと奈々子の母を見た。
「いえ、ね、奈々子がさっぱり読めないっていうもんですから、ちょっとみせてもらったんです。どうもフランス語で書かれてるみたいなんですのよ。読めないはずですわ」
「フランス語……」

奥付を開いてみると、横文字で著者らしい人の名、出版年月日が刷られている。初版は百年くらい前の日付だ。以来、幾度か版を重ねている。
奈々子の母もそこはチェック済みらしく同じことを言った。

「大正時代に書かれたのです。著者はアルベルト・フォン・ラウレンスというひとで——」

「――え！？」桧山はなぜか心臓をわしづかみされた気がした。

「ご存知なんですか？」

「いえ――」
　知らない。聞いたこともない。
　だが一度とびあがった心臓はどきどきと激しい音をたてた。そして思わず「これをください」と本屋の店員に言うようなせりふを言った。
奈々子の母はにっこり笑い、「二百円で買ってきた中古ですもの、どうぞ持ってってくださいな」

　奈々子はモノクロの遺影のなかで優しく微笑んでいた。
「いい写真ですね」社交辞令でなく、しぜんとそんな言葉がでた。
「あの年のお正月です。それが最期の写真になりました」

　彼が育った桧山家も、通った高校も、奈々子の家からそう遠くない。が、桧山家には先日挨拶をすませたし、高校はまあどうでもよかった。
　彼は西ノ宮の家を辞したあと、まっすぐ図書館へ向かった。思い出深いといえばそこだけだったのだが、館はあいにく改修中で閉まっていた。
なにも利用者が多い夏休み中にやらなくてもよさそうなものだが、縁がないというのはこういうことなのだろう。
　さようなら、か、と彼はつぶやいた。

069.

　ひろは久しぶりに自宅の周辺を走った。
　針葉樹と土の匂い、木漏れ日と緑が心地よい。その中に浸ってなにも考えず、ただ走ることだけに集中する。走ることはひろの悦びであり、これ以上に楽しいことなんて考えらんない、と思うのだった。
　とりあえず周辺を一周し、コースを変えてもう一周しようかと考えていて、参道の端に見慣れない車がとまっているのをみつけた。
（駐車場はこのずっと奥だって知らないのね。おしえてあげようか）

　車に近寄ると、その向うの鳥居を入ったあたりに人が立っていた。
（あの人の車ね）
　小走りに近づくとその人が振り返った。ひろは自分の顔色が変わるのがわかり、足がすくみ、頭の中が真っ白になった。
　――桧山さん――

　彼もまたひろの愛想笑いがみるみる凍りつくのを見ていた。ここで会える気も、会えない気もしていた。
　会えなければ心残りになるし、会えたら会えたで……なんて言おうか……どうしても、いい考えが浮かばなかった。

「……待ってた」思いがけない言葉が口をついて出た。
「おまえに会いにきたんだ……」
「く、来るなら来るって、言ってくれればいいのに」ひろもまた自分でも思いがけないことを言い出した。
　ななこにも桧山にも一度も会わなかったことにして、なにもなかったことにしたかった。あの夜を最後に会わずにすめば、それも可能だったかもしれない。なのに。
「言ってくれれば、もっとちゃんとしたかっこ、してたのに。いつも髪の毛振り乱して！　いつも汗だくで！」

　ななこのたおやかな夏服姿が脳裏に浮かんで消えた。
　あの妖精と、汗を撒き散らして地面を走る自分とを、いつもどこかで比べていた。そして決して追いつけないことも、かなわないこともわかっていた。
ななこはあの姿のまま、永遠にかれの中で生きるのだ。

「ひろ」と彼ははじめて聞くような低い声で言った。
「オレは、走っているおまえが好きだ」
　――これは夢だわ、とひろは思った。これは、こうなってほしい、っていうわたしの願望よ……

　彼は半分泣きべそをかいているひろの顔を覗き込まないよう、隣に並んで立った。

「奈々子のことは――元はといえばすべてオレのせいだ。おまえにさせた不愉快な思いはすべてオレの甘さのせいだ。……すまなかった」

　――不愉快なことなんて、なんにもなかったよ！　ななこはわたしの友だちで……わたしの一部みたいなもの……
　ひろはふとなにかひらめくものを見た気がしたが、うまくつかめず、逃がしてしまった。

「あたし、あなたの心の中に妖精が棲んでるの、知ってるわ」
「妖精は人とはいっしょに棲めないからな。住み着くならそういうところだろう」

　桧山は桧山で、オレはいったい何を言ってるんだろうと思った。今まで思ってもみなかったことが、詩のようなイメージをもって沸いてでてくるようだった。彼は見たイメージのまま、言葉にするだけでよかった。

「ひろ」と彼は隣に同じ方を向いて立った。
「オレは明日、日本を発つ」
「明日――」
「いろいろ考えたんだ。オレがおまえの前にいると、おまえを苦しめるんじゃないだろうか」
「そんな、そんなこと――！」
「さっき、そういう顔をしていたぞ」
「――――」
「……だから予定を繰り上げた。明日発つ」
「待って……」
「時間が要る。オレはそう思う」
「……桧山さん」
「いつかまた会おう。オレが会いに来る」
「……」
「会いに来る。必ず」
「……ええ」
「ありがとう」
「……」
「オレは見送られるのは好きじゃない。オレがおまえを見送ろう」
「……はい」
　桧山はそっとひろから離れた。
「さあ、行って！」
　手が背中を押した。

epilogue

ひろはうなずいた。シューズが玉砂利をきしませた。
目を見交わすことも手を取り合うこともない別れだった。
背中を押した手は力強く、温かかった。生きた血と肉の温かさ、信じられる現実だった。彼の強い視線がみているのがわかった。

もう一度見つめ直そう。自分の心の中を。それには時間が要る。彼の言うとおりに。
彼が約束どおり会いに来たときに、どんな答えをするにせよ堂々と彼の前にたてるように。
問い続けながら、走ろう！

遠く去っていくエンジン音に、針葉樹の杜の中を走りながらひろはつぶやいた。

さようなら
桧山さん

5・「さようなら」

nanako-fifteen　Ⅱ　完

あとがき

これ、原案を最初に書いたのはいつだったか…もしかして二十年くらい前かもしれない。固定電話なんかも出てくるし、古いと言えば古いですね。今回読み直し書き直ししながらあちこちで泣いてしまった（自分で泣いてどうする…）。

なのですが…時代もの（池波正太郎作品など大好きです。ついでに、時代物とはちがうけど、漫画版攻殻機動隊なんか大好き）でもそうですが、時代が変わって生活や環境が変わっても、人の心情というものはそうは変わらないもの、普遍的なものなのだと思う。

ここは大言壮語と笑って読み飛ばしてください。筆者はそういう普遍性のある作品を書きたい、そう思うのです。

2025年1月20日　記

奥付

nanako-fifteen　Ⅱ
　　5･さようなら

2025年 1月20日 初版発行

著者　　峯村　明　E-mail
表紙素材　「Designer」

制作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社